大使館から夜會に招かれて居る。何だか落ちつかない氣分になつてしまつたので、これにでも行けといふ譯で、Sと二人でまた出かけることにする。英吉利以來着たこともない燕尾服のホコリを拂はせたり、少し痛むエナメルの靴を踏みしめて見たりして居るうちに、Fさんを誘つて行くことに相談がきまる。FさんはTと一緒の宿に此間から泊つて居られる。皆がさんづけに呼ぶ丈けの大先輩である。宿の入口で尋ねるとFさんはTの部屋に居るといふ。

Tが遙々本國から携帶した夫人は、先月こゝの病院で女兒を分娩した。まだ顏の赤みもとれないが、けふからは日本人だから二歳に成つた譯だ。先程若い哲學者のYが來て、つくづく赤ん坊を眺めた後、何とか挨拶せねばならぬと思つたんのか、『よくお父様に似てゐますな——』といつたさうで、Tも夫人も大に恐縮して居つた。廣くもない部屋の眞中に横たへた寢臺に、此の赤二歳が置かれて、枕もとの椅子にFさんとTとがビールを呻り、夫人が罐詰を開けたり、蜜柑をむいたりして、こゝでもが正月氣分を味はふに餘念ないらしい。酒の飲めないSはどんな方面にでも話の種を持つて頻に談ずる。FさんもTも話の好きな人である上に好きなビールを控えて居るからお互の話は縷々として盡きない。何かの拍子にSが佛蘭西人の樣な樣子をして、チアンと叫ぶと、早速Tがそらきたとばかりに『そのチアンですよ、さる日本の有名な人が佛蘭西の小說を譯した中にチアン、チアンと繰返したやつを、保てよ、保てよと譯してゐるですよ』といふ。

保てよ、保てよかと一同繰返して感嘆するといふやうな有樣だ。その中風呂の話が出てこんどは夫人が入浴を勸める。この部屋には風呂は附屬して居るので何度浴つても只だ。只なら遠慮は要らぬと思つたか早速Sが頂戴する。Fさんは自分等の燕尾服に眼をつけて大使館行きかと問はれる。實は誘ひに來たのだといふと、生憎燕尾服を